

北海道新聞 2009年6月29日

<高齢者介護に進出>



真相
深層

アイホーム青空で利用者と昼食作りの手伝いをする介護福祉士の千葉さん（右端）と看護師の細野さん（右から3人目）。懐かしい歌謡曲の話など話題は尽きない

道内で元気な高齢者の介護現場への進出が始まりつつある。登別市には、職員の半数以上が60代以上という珍しい介護施設がある。高齢者が働く道内各地のシルバー人材センターでも介護サービスの受注が好調で、いずれも利用者からは「同世代で親しみやすい」と好評だ。「低賃金で重労働」と言われ、若い世代が根付かない介護現場。超高齢化社会を迎え、新たな「老老介護」の登場に、変化の兆しが見える。

（室蘭報道都 徳永仁）

職員の半数が60歳以上

「利用者さん同士仲が良くっていいですね」。登別市の通所型介護施設「デイホーム青空」の介護福祉士の千葉達雄さんが、利用者と近所を散歩中、住民からそう声を掛けられた。「僕は職員なんだけどね」。照れ笑いする千葉さんは73歳。最年少の76歳の利用者と、ほとんど変わらない年齢だ。

道内 離職絶えぬ現場 同世代が支える

青空は2007年の開設当初から高齢職員を積極的に採用。現在は介護福祉士や看護師ら職員15人のうち8人が60歳以上で、70代も2人いる。入浴介助などの力仕事は20～50代の職員が主に担い、高齢職員は話し相手や散歩の付き添いなどを担当する。看護師の細野教子さん（64）は「いろんな世代の人が助け合って介護しているので、施設の雰囲気も温かい」と話す。

こうした年齢構成について渡辺聡施設長（50）は「高齢の職員は利用者の体調の変化によく気付き、良き話し相手にもなっている。若い人が定着しづらい職場で、新たな施設のあり方になる」と話す。道は、職員の半数を60歳以上が占める介護施設は「道内では聞いたことがない」という。

胆振管内豊浦町の特別養護老人ホーム「幸豊（こうほう）ハイツ」で、1985年の開設時

から看護師として勤務する新免（しんめん）寿江さんは85歳。20～50代の職員約60人とともに、今でも週5日働く。津呂宇諸（つろひろかず）施設長代理は「病院でも看護師探しに苦労する時代。若い人が少ない過疎地の施設は、有資格の人材確保は容易でない」と話す。

人材センター 依頼堅調

高齢者の進出は施設にとどまらない。

原則60歳以上の方が働くシルバー人材センターでも、介護サービスの依頼が引きも切らない。道シルバー人材センター連合会によると、道内40センターのうち30センターで、介護保険外として身の回りの世話や排せつ介助などの介護サービスを行っており、受注数はここ数年、年間千件を超え、堅調に推移する。同連合会は「最近は『同世代の人に話し相手になってほしい』など、高齢者同士のふれあいを求める依頼も目立つ」という。

高齢者進出の背景には、介護現場が抱える構造的問題もある。財団法人・介護労働安定センター（東京）の2007年度の全国調査によると、介護従事者の離職率は21・6%。全産業平均の16・2%を上回る。離職者のうち勤務年数3年未満が74・7%を占め、人材が定着しない傾向も顕著だ。

2000年度の介護保険制度導入後、政府が過去2回介護報酬を引き下げた結果、収入の低下が加わって、深刻な人材不足を招いた。

このため職員の給与増を狙って、4月からは初めて介護報酬を全体平均で3%引き上げたが、各施設は赤字返済や運転資金に充て、職員の給与増につなげていないのが実態だ。

道医療大の石川秀也教授（高齢者福祉）は、高齢者の介護現場進出を「高齢化が進み、若い世代が介護を担うという従来の発想を転換する重要な試み。介護現場を支える高齢者の存在は今後、大きくなる」と話している。